

ない後進の方々を受け入れることは、僕にとってもはじめはなかなか難しいことでした。KAATの芸術監督になり、意識的に若い劇団やつくり手の作品を観るようになりましたし、自分の中にはない表現や様式に驚かされもした。逆に、自分の稽古場を若い演出家に見てもらい、稽古場レポートを書いていただく企画なども、お客様には絶対に面白いと思って進めましたが、自分自身は身の置き場がないほど恥ずかしかったです(苦笑)。

でも最初こそ感情的なノッキングがありました。じきに客観的に若い劇作家や演出家たちの個性と魅力、可能性がKAATにどれだけ有効なものかが肌で感じられるようになり、KAAT開館当時からおつきあいいただいていた地点の三浦基さん、チェルフィッチュの岡田利規さんに加え谷賢一さん、杉原邦生さん、ダンスでは山田うんさんや平原慎太郎さんともクリエイティブな連携が図れるようになったのは、劇場の財産だと思っています。僕自身も身構えが解け、表現者として強くなれたかな(笑)。

—非常にバランスよく、多彩な表現者が出入りするイメージがKAATにつきつつあると思います。

白井 KAAT内のスタジオやホール、稽古場からホワイエまで、あらゆる設備で常時複数のアーティストが創作や表現をしている、という状態が僕の夢であり理想なんです。劇場内5か所で異なる公演・展示などが行われたのが、在任中の最高記録ですが、あの時はとても嬉しかったですね。スタッフのみんなは、非常に大変だったと思いますが。

バトンを渡す決断と理由

—ご自身の創作で、KAATでの活動指針を定めた、ターニングポイントになった作品や時期はどこでしょうか？

白井 2014年、芸術参与就任後第一弾の『Lost Memory Theatre』は、「演劇は、舞台は総合芸術だ」という僕の信じることを表明した作品。原案・音楽を手掛けた三宅純さんのアルバムにインスパイアされ、

谷賢一さんがオリジナルのテキストを書き、森山開次さん振付のダンス、三宅さんのバンドの生演奏という豪華なつくりで、多彩な表現要素が舞台上で化学反応を起こす様を観ていただきたかった。

また、「この路線を突き詰めよう」と自覚的になったのはイブセンの『ペール・ギュント』(15年)、プレヒトの『マハゴニー市の興亡』(16年)からでしょうか。20世紀初頭の作品群に強く引かれるのは、社会情勢が僕らが生きる今と重なるから。以降もヴェデキントやコクトーなど時代を緊密に映す戯曲を選び、創作していった。KAATではこれら作品を通し、演劇が時代や社会といかに結び、そこで人間がどう変わっていったのかを検証する作品を創造するという僕の意思表示です。

もう一つは、芸術監督として、KAATと一緒にクリエーションをしていただく表現者を決めたということ。僕の中では勝手に「芸術監督指名枠」と呼んでいたのですが(笑)、後進の方々はもちろん、同年代や先輩方からもお招きする方を僭越ながら選ばせていただいた。芸術監督の先輩である串田さんや、果たせなかったけれど蜷川さんにもお声がけて



いましたし、次に芸術監督となる長塚圭史さんもお一人です。その方々には1年から1.5年に一作、必ずKAATで創作・上演をしていただくこと強引に決め、劇場のカラーをつくる片棒を担いでいただきました。

—長塚さんも白井さん同様に芸術参与を二年経験し、来春からの着任です。白井さんが芸術監督のバトンを渡すタイミングは何故、今だったのでしょうか。

白井 長塚さんには折角の機会なので、会議など含め僕が仕事をしている現場を十分に見ていただき、そのうえでご自身の路線を打ち出して欲しくて芸術参与を経験していただきました。交代のタイミングは……いざ任期が終わりに近づいた今は寂しくもあり、感染症禍でさらに上演延期となった作品があることにジレンマも感じているのですが(苦笑)、長塚さんをお願いしようと思った三年ほど前、「KAATの活動は、もっと先鋭的であり続けるべき。そのためには自分の尖り方では足りない」と思ったんです。

革命家には、強引なまでに周囲を巻き込み扇動する力が必要ですが、僕はものの道理や人の話を聞き過ぎてブレーキを踏む瞬間があると、自分でも気づき始めた。それに「人間は五年で慣れる」というのが僕の持論で、KAATにはまだ攻めるべきことがあるのに僕自身が慣れて感覚が鈍くなり、気づくべきことを見落としてしまうのが怖かった。それを回避するためにも若い力を投入すべきだ、と。

—シビアな決断をされたんですね。

白井 長塚さんは演劇への真っ直ぐな情熱の大きさはもちろん、17年の『王将』のように、大長編をごく小さな劇場で、劇団のような座組で一挙上演するという企画を実践するなど、舞台芸術と多角的につき合える方。きっと「クソッ！それは思いつかなかった」と僕を悔しがらせる企画や作品を、KAAT発でたくさん生み出してくれると思うんです。

欧米に比べ、日本では冒頭で言ったように芸術監督の職域だけでなく、劇場の担うべきところもまだ定まってはいない。長塚さんには、後に「KAATシステム」とでも呼ばれるような、創作と表現を幅広く発信できる劇場の在り方を大胆に切り拓いて欲しいと、心から願っています。

